

京都芸術大学紀要二十五号の発行にあたって

本学の紀要Genesisは、一九九四年の創刊以来、作品を紹介するグラビアページ、研究論文、研究ノート、調査報告書など、本学教員の創作や研究活動を掲載する学術誌として毎年刊行を続けてきた。

今、私の手元にある、二〇〇七年発刊の紀要11号のページを繰ってみると、カラー40数頁に及ぶ作品報告、芳賀徹第3代学長を含む本学教員の執筆による論文、調査報告、研究ノート、講演録など多彩な内容で、当時の本学教員の研究や創作活動への熱気が伝わってくる。

紀要Genesisは、二〇一九年からPDF版に移行して新たな装いのもとで再スタートを切った。

PDF版による刊行のもつ特長は、「自由度の高さ」である。通常の刊行の他、時宜に合うテーマを取り上げた特集号や、学術シンポジウム等の講演録の刊行、あるいは、学際的なチームによる本学ならではの芸術研究プロジェクトの成果の発信といったことも自在に行うことが可能である。また、掲載論文ごとのPDFファイルを用意すれば、インターネットを活用し、個々の研究内容について読者とのやりとりを通じて議論を深めることも容易にできる。著者と読者の距離が近くなり、活発な相互交流が実現できることは、PDF版による発行の大きなメリットだろう。

多様な専門領域を有する総合芸術大学にふさわしい紀要のあり方については、現在、さまざまな可能性が編集委員会で検討されている。多彩な研究成果の集積となるPDF版の紀要Genesisが、内容の豊かさやクオリティの高さを矜持として、新たな研究を生み出す跳躍台としての役割を担う魅力的な媒体となることを願っている。

二〇二一年八月十八日

京都芸術大学学長 吉川左紀子